



国土交通省鉄道局長賞



JR御殿場線 御殿場・足柄間

「暑い夏に」 塩川里美（静岡県）  
歴史上最高に暑い夏が来るらしいよ  
山に行こうか  
海に行こうか  
君と一緒になら  
僕史上最高にあつい夏になるよ  
きつとね

鉄 博 賞



JR予讃線 宇和島駅

「私は私」 草山 歩（神奈川県）  
「あの子みたいになりたい」と  
強く焦がれたことがある  
東京 名古屋 新大阪  
あの子はどこでも人気者  
「あの子みたいになりたい」と  
夢中でもがいたことがある  
顔も塗装も雰囲気も  
近付きたくて着飾った  
そうして分かったことがある  
「私はあの子になれない」と  
けれど 気付いたこともある  
「あの子も私になれない」と  
私は私なのだから  
ディーズル仕掛けの命を燃やす  
私は私なのだから  
終着駅では笑っていたい

鉄道写真詩とは

鉄道写真詩とは、「鉄道写真」に「詩」を組み合わせる鉄道の魅力や旅情を表現する芸術活動です。  
いつもの鉄道、旅先での鉄道、その時々にとらえた鉄道の表情とともに作者の心情が伝わってきます。

## 米屋こうじ賞



大井川鐵道 福用・大和田間

「秋影の線路」 丸山かおる（埼玉県）

すすき揺れ  
へッドライトに映る  
秋の影  
駅灯りきりのホーム  
風のとりきりのホーム  
列車の穂が揺れ  
銀色の穂が揺れ  
夜消える  
星ひとつ光る  
ささやきと  
夜のあやき  
夜明けまで  
空が染まり  
新しき光  
すすき道  
朝露に輝き  
希望満ち

## 水無田気流賞



東武日光線 東武動物公園・杉戸高野台間

「沈黙」 池田淳二（埼玉県）

霧は記憶を食べる  
踏切は夢の境界線  
灯りは消えたまま  
誰も待たない  
列車は来ない  
そのれどもいい  
鉄道の匂いが  
過ぎ去るが戻す  
人の気配はない  
誰かの気配はない  
霧の奥に声が  
沈黙の奥に  
沈黙切った  
沈黙切った  
沈黙切った  
沈黙切った

国土交通省鉄道局後援 一般社団法人交通環境整備ネットワーク主催  
鉄道写真詩コンテスト2025 ー 写真と詩で伝える鉄道の魅力 ー

協力：鉄道博物館・東武博物館・日本現代詩歌文学館

協賛：旅の手帖 ・ 交通新聞社 ・ 関東交通印刷

鉄道×文学の新しい表現に挑戦！ あなたの撮った鉄道写真にあなたの詩を添えて  
「鉄道写真詩」は、「鉄道写真」に「詩」を組み合わせる鉄道の魅力やその旅情を表現する芸術活動です。  
本コンテストは、その登竜門としての役割を担うもので2017年に第1回を開催し、今回で9回目となります。

作品募集：2025年7月1日～9月30日

審査委員（敬称略）：五十嵐徹人（国土交通省鉄道局長）・石田 亨（鉄道博物館長）

米屋こうじ（鉄道写真家）・水無田気流（詩人・社会学者）

原 潔（一般社団法人交通環境整備ネットワーク代表理事）

多数のご応募をいただき、ありがとうございました。

本コンテストの作品及び過去の実賞作品は、ホームページでご覧いただけます。 <https://ecotran.or.jp/photo/2025/>





## エコトラン賞

「線路で働く男たち」

小野凌輔(富山県)

鉄の匂いが夜空を染める  
重機の唸りが地平を揺らす  
男たちの影が線路に刻まれ  
一瞬の静寂が明日を支える

火花が跳ねれば夜が割れる  
錆びたレールに命を吹き込む  
汗の塩が風に解けてゆく  
星屑を照らす作業灯の下

大地の鼓動を手のひらで測り  
継ぎ目なき軌道を夢見る  
コンクリートの隙間から芽吹く  
名もなき草のしたたかさよ  
鉄の業火のともしびよ

最後のボルトが締められる頃  
遠くで汽笛が朝を呼ぶ  
消えゆく工具の音のあとには  
光の帯より新たなときが刻まれる



あいの風とやま鉄道

## エコトラン賞

「あみだくじ」 栗原正隆(大阪府)

進むべき道がわからない私  
ゆく先見えず ひとり佇む

誰か教えてくれ  
でも 誰もわからない

運を委ねる あみだくじ  
すべてを得るか すべてを失うか

進むべき道を見失った私  
不安と恐怖 ひとり固まる

誰か導いてくれ  
でも 誰も頼れない

運を委ねる あみだくじ  
天に昇るか 地獄に落ちるか



近鉄 大和西大寺駅

## エコトラン賞

「四葉のクローバー」 山形真司(兵庫県)

誰かが置いていった  
四葉のクローバー

あなたの幸せは

途中下車したのかもしれない

ガタンゴトンガタンゴトン

次の幸せはどこに向かつて

運ばれていくのだろうか



JR神戸線

## エコトラン賞

「東京に雪が降る」 吉田信正(埼玉県)

雪が降る

喧騒を沈め 音を消す

穢れを清め 東京に雪が降る

行き交う人はみな親し気だ

「東京はさみしい」

いつか君が別れ際につぶやいた言葉だ

静かに 雪が降る

街を眠らせ 雪が降る

君のいない東京に

雪が降る



JR中央線 飯田橋・市ヶ谷間

## エコトラン賞

「ひと夏の思い出」 小倉希一(埼玉県)

ドドーン。空が照らされる。

いつも違うホームの姿。

彼女の浴衣がほのかに染まる。

「撮れた？」と聞く君

「まあまあかな。」本当は自信作。

ヒューン。火花の色に染まりながら、

滑り込んできた電車にのせられて

歩き始める。

彼女の笑顔。

夜空を照らすまん丸い火花。

笑い声がホームから去る電車をみて言う。

「また来年も、見れるといいな。」



JR京浜東北線 赤羽・川口間

## エコトラン賞

「風わたる。」 櫻井路子(東京都)

無人駅を風がわたる

多くの旅ひとが荷物をおろし  
軽くなったところを吹き抜けていった

雑踏でふと頬を撫でる風に

あの時の匂いがした

そっだ。

旅に出よう。



山形鉄道フラワー長井線 羽前成田駅

## エコトラン賞

「初化粧」 岡本由紀(東京都)

憶えたての手順で慎重に、  
肌色のクリームを塗っていく。

眠れないまま夜を明かしたことが  
悟られないよう、目元にも気を配る。

眉を整え、頬に紅を挿すと、  
顔にはわりと明かりが灯る。

扉を開けたら秋の風。

颯爽と、タタンタタンと。

真つ赤な線香花火へまつしぐら。



JR伯備線 備中川面・方谷間

## エコトラン賞

「使命」 三田村 裕(神奈川県)

ディーゼルエンジンのアイドリングの音と  
鳥のさえずりと  
風に葉のそよぐ音と

聞こえるのはそれだけ

駅で列車を待つ人もいなければ  
降りる人もいない

それでも列車は走る

雨の日も 風の日も

それが必要とする人のために

秘境駅とも言われる駅のホームに立ち  
発車の時刻を待つ運転士の姿に

静かでありながら強い使命感を感じた



JR飯田線 金野駅

## 講評

### ◇ 米屋こうじ Yoneya Koji 鉄道写真家



今年9回目を迎えた本コンテストですが、初めて審査委員全員の票を得たのが、塩川里美さんの「暑い夏に」(国土交通省鉄道局長賞)。ダイヤモンド富士の瞬間的なタイミングで、御殿場線の列車がやって来る。奇跡にも見える写真ですが、地元の利を活かし、何度もチャレンジし得ることができた、努力の賜物ではないでしょうか。

壮大な写真ではありませんが、草山歩さんの「私は私」(鉄道博物館賞)は、鉄道の愛らしさが伝わってくる作品です。ディーゼルの気持ちで詠んだ詩に、思わず感情移入してしまいます。

私が選んだ丸山かおるさんの「秋影の線路」は、暗闇のなかでの作風に苦労がしのばれる作品です。実際に列車が接近するまで不確定な状況のもと、的確なフレーミングと露出で情感のある一枚になっています。詩は語句の長さが揃えられて、テンポよく読むことができ、そよ吹く秋風のような心地よさを感じました。

写真撮影でフレーミングの基本に「引き算」という考え方があります。主題を明確にするために、不要なものは画面(フレーム)に入らないように撮影するものです。詩にも似たような要素があるのではないのでしょうか。カメラ・レンズで切り取るかわりに言葉で切り取って整理してゆくことで、伝えたいイメージが鑑賞者により伝わると思うのです。

今年も優秀な作品が数多く寄せられるなかで、詩においては全体的に「少し長いなぁ」と感じられる作品が多かったという印象を受けました。写真において「引き算」で切り取るように、言葉を選んで整理してみたいかがでしょうか？

### ◇ 水無田気流 Minashita Kiriu 詩人・社会学者



今年で9回を迎える鉄道写真詩コンテストは、鉄道にまつわる記憶や思いを想起させる秀作が数多く寄せられました。旅の思い出、人生の一場面、そしてこれから起こることへのわくわくした気持ちなど、鉄道のある風景に重ねた作品の数々を拝見していると、この鉄道写真詩という表現ジャンル自体が年々成熟して来ているのを実感し、大変に嬉しく思いました。

今回私が選出させていただいた池田淳二さんの「沈黙」は、幻想的な霧の東武鉄道日光線の踏切の佇まいが静謐で、一連書きで淡々と綴られた詩も写真の雰囲気とよく調和しています。連を分けないこのような詩は、いわば「息継ぎ」がないので一気に読み進められるのですが、一方で書かれているのは踏切が象徴する「境界」というのが印象的です。踏切が、現実と夢、過去と現在の境界としても二重写しに描かれており、初行の「霧は記憶を食べる」や、中盤の詩調が転換してすぐに「鉄の匂い」といった身体感覚的な描写が絶妙な効果をもたらしています。これらが、今はいない「何か」に向かってたしかに手触りを表現し、作品全体に命を吹き込んでいます。また写真自体の色調も抑え気味であるため、詩の余情を感じさせる相乗効果を生んでいます。

国土交通省鉄道局長賞となった塩川里美さんの「暑い夏に」も、短くて思い切りの良い、とても勢いの良い詩で、富士山、太陽、御殿場線の三点がぴったりはまった素晴らしい作品となっていました。

「詠み鉄」の皆さま、今年も誠にありがとうございました。来年も、みなさまの作品を楽しみにお待ちしております。